



大学入学共通テスト

1月14日(土)、15日(日)に、58期生が大学入学共通テストを志学館大学で受験しました。前日は2限目まで授業を受け、合同LHRで前日と当日の注意事項を入念に確認しました。その後は実際に試験会場の下見を行い、最後の準備を終えました。

当日は、感染症対策のために一部の教員しか会場に行くことができませんでしたが、引率された先生方が、本校生の様子を次のように語ってくれました。次年度以降に引き継ぎ、役立てたいと思います。

- ・手を振りながら明るく試験会場へ入っていった。
- ・不慣れな場所とあいにくの雨天だったが、集合が非常に早かった。
- ・控え室では、各々が最終確認に追われていたが、緊張感を保ちつつ、落ち着いてもいた。
- ・周りに中央生が大勢いることで安心感があったようだ。仲間のありがたみを感じているようだった。
- ・受験票や筆記用具など、忘れ物がなかった。
- ・初日は緊張が見られたが、2日目には対応していた。

時間に余裕を持ち、コンディションを整え、良い状態で共通テストに臨んでいた58期生を頼もしく思います。後輩たちも、先輩方を見習ってほしいと思います。

1月16日(月)は、自己採点をしました。この採点結果をもとに出願先を決定します。59・60期生は、自己採点まで含めた3日間が共通テストであることを意識してください。そして、自己採点が正確でないと正しい出願ができないので、これからの模擬試験では、試験後の自己採点への意識を高めていってください。

1月20日(金)には、最終進路判定会が行われました。自己採点と各予備校の判定、さらに生徒の個別学力試験(以下、2次試験)で必要な科目の現状や伸びしろを踏まえ、出願先と合格可能性について58期生全員について話し合いました。

後日、最終進路判定会の結果を踏まえた三者面談が行われました。今年の共通テストでは得点調整が行われたことに加え、昨年度よりも平均点が上がるなど、点数の動きが激しく、志望校の選定が難しくなりました。そのような状況でも生徒・保護者・担任が知恵を出し合い、覚悟と決意を確認し、出願先を確定させました。

58期生にとっては、人生の中で最も大きな選択だったと思います。ここで自分が下した最終決断を信じ、個別学力試験に向けて全力で走り抜けてほしいと思います。

2次試験対策開始

1月17日(火)から、2次試験対策の特別授業が始まりました。自分の受験の型を理解し、コースを選択する特別授業は、これまでとは異なり、予習・復習・演習の全てを必要な科目のみに絞るため、密度が格段に上がります。共通テスト後の国公立大学前期日程までの約40日間は、ハイレベルな勉強にストレスを感じる人もいます。ただ、2次試験対策に必死に取り組む中で、必ずそれまで積み上げてきた経験が頭の中で結びついていきます。そうした手応えを実感しながら、共通テスト以上に深い理解と思考力、表現力が求められる問題に対応する力を身に付けていきます。例年、2次試験対策が進んでいく中で、「勉強が楽しい」という声が上がります。正解を導き出せるという実感が、そう感じさせます。共通テストはあくまでも通過点に過ぎません。本当に勉強が面白くなるのはここからです。

59期生はあと約50週で、60期生はあと約100週で58期生と同じ立場になりますが、一日でも早く、「勉強が楽しい」と感じることができるようになってほしいところです。日々の学習を大切に、基礎基本を早期に定着させ、受験期を迎えましょう。

数字を意識する

3年生は「合格ライン」も意識しましょう。国公立大学2次試験は記述式の2～3教科が主流です。医学部医学科等の最難関を除くと、「共通テスト7割+2次5～6割」で合格ラインクリアとなるところが多いようです。共通テスト自己採点を元に、2次試験で必要な数字を確認しましょう。下表は左から総点、合格者平均点です。なお、この数字は合格ラインよりも高い数字です。

鹿児島大・法文・多元・前	1000	642.07
鹿児島大・工・機械工・前	1250	666.22
九州大・文・前	750	496.81
九州大・理・物理・前	1150	710.93

【2022年度入試結果。大学HPより抜粋。】

共通テストの平均点が異なることや傾斜配点に留意しつつ、漠然と「共テと2次で6割得点する」ではなく、2次科目でどれだけ得点できるか、具体的な数字を想定しましょう。リアルなシミュレーションを通してメンタルも強化し、本番に備えましょう。

国公立大学前期日程まであと25日。頑張れ3年生。

「本気の努力」

1年7組 副担任 茶園景子

60期の皆さん、一年生として過ごす時間も少なくなってきましたね。この一年を振り返ってどのような思いを抱いているのでしょうか。皆さんが何かを考えるきっかけになればと思い、少し私自身の話をしたいと思います。

私は高等学校の書道教員をしています。それと同時に公募展と言われる書道展に出品する活動も続けています。

ある作品展に出品した時のことです。結果が発表される日、いつもは届くお祝いのメールが誰からも届かず、不安になりながら新聞を確認すると、私の名前はありませんでした。結果は落選です。教員になりたての頃に一度落選したことがありましたが、その時はまだ若く、仕方ないと笑って済ませていました。しかし、それからウン十年の年月を経ての落選には非常にショックを受けました。当時教えていた書道部員が入選していたことや、いつも指導してくださる恩師に「自分の指導がたりなかったのでは・・・」と思わせてしまったことも、自分が情けなく、二重三重にショックだったのです。

しばらくして、この件を友達に話しました。すると友達は「厳しいことを言うようだけど、本当に本気で努力したのかっていうことじゃないの?」と言ったのです。慰めてくれるとばかり思っていた私は一瞬言葉を失い、そして、ムカつきました。「何もわかっていないくせに・・・」と。しかし、ムカついたのは、言われたことに心当たりがあるからです。本当に心の底から結果を残したいと努力したのか?と問われると、自信を持って「はい」と言えない自分がいました。心の中で、仕事が忙しいとか、時間が足りないとか、気分が乗らないとか、いろいろな言い訳を並べて、頑張ったふりをしてきたのだと思います。

そして、落選を知っている先輩からは「その作品展を見に行ったのか」と言われました。私は、自分の作品がないのだからと、見に行くこともしなかったのです。落選したからこそ、勉強をしに作品展に出向くべきだったのです。

私の行動は「本気」ではなかったのです。できない言い訳、やらない言い訳ばかり準備して、本来やるべき努力をしなかった結果だったのだらうと思います。

では、本当に本気で取り組んでいたら入選できるのかというと、それはまた違います。そうであつたらみんな頑張れるはずです。思うような結果がでるとは限らないけれども、そこに至るまでの過程には意味が生まれ、結果の受け止め方、その後の成長は全然違ったものになるのだらうと私は考えています。この落選で悔しい思いはしたけれども、私はいろいろなことを考え、学ぶことができました。自分にとっては必要なことだったと思います。

高校生の皆さんとは立場が違いますが、何かに向かって「努力する」という点では同じです。あなたは将来の夢を叶える為に、今、何をしていますか?これから何ができるでしょうか。こんなに恵まれた環境で学習できるのも、残りたった2年です。みなさんはどのように過ごしますか?

ゆっくり、いそげ

2年1組 担任 黒木 明男

日々、部活動や進路実現に向けた学習を頑張っている2年生の皆さんは、やるべき事や考えること、悩むことも多くて大変な毎日を過ごしているかと思います。テスト前の学習、テスト後の訂正、予習・復習、小テストの準備など数え上げたらきりがありません。

しかし、1日は24時間しかありません。計画通りに事が進まないことが多いのではないのでしょうか。期限内に提出するために写すだけの訂正や、表面的な学習になり、自己嫌悪に陥る。あきらめてしまう。睡眠時間が削られて、授業中に眠くなる。負のスパイラルに入り込む。今までのやり方ではいけないと考えている人もいるのではないのでしょうか。

今まで自分が慣れてきたやり方を変えることは、勇気がいるものです。自分が習得してきた知識や考え方、価値観を変えていくのも大変なことです。人間の習性として安定性を求めるのは本能的に当たり前のことです。現在の豊かな生活を支えてきた科学も、二分法による合理的な思考の基に成り立っています。善か悪か、正しいか、正しくないか。しかし、発達してきた科学により、環境は破壊され人類の生存も脅かされています。従来の方や価値観、やり方を変えていく時期にきています。

自己知・社会知・方法知や観・学・術という言葉があります。生きることは学ぶことだと思います。生きていきながら、すなわち学びながら、自分のことを少しずつ理解し、社会のことを知り、自分なりに解釈、他者との対話の中で理解を拡げ、深めていく。そして、自分の道を探りながら目標を立て、どのようにして、どのようなやり方でその目標を達成するか日々、悩みながら、失敗しながら学んでいく。

国が異なれば、言葉も異なる。言葉が異なれば、思想や思考も異なる。文化や価値観、職業観も異なります。働き方も日本では多くの人は、一つの職業を全うしますが、異国では、一人の人が、2つ、3つの職業を持っています。歴史的な背景もあるでしょうが、社会のしくみや制度は異なります。よく言われるのは、多様な考え方を持った人たちがたくさんいる社会の方が、危機には強いということです。一つの物事がうまく行かなくなったとき、別の職業や別の人間関係などで、しばらく事を進めていくことを重視しています。

今まで、当たり前と思っていたことは、社会が異なれば、それが当たり前ではなくなります。二分せずに、多様な考え方や方法を、視点を変えて探ってみてはどうでしょうか。一人の人間が、昨日言っていたことと、今日言ったことは変化していてもいいでしょう。その変化の可能性や多様な人の価値観や考え方、方法を多面的に検討して、自分に合ったものを模索してみよう。

変化のきっかけは、他者の存在であり、多様な考え方や価値観です。それを理解し、自分の観を変化させていくのは、時間を必要とします。自分の本当の幸せとは何か、じっくりと焦らず、失敗や挫折をしながら、一人で悩まず、他者と対話し、自己と対話して追求していこう。ゆっくり、いそげ。

決断のとき

3年1組 副担任 春山 隆

松下幸之助氏を皆さんは知っているだろうか。パナソニックの創業者であり「経営の神様」と呼ばれた。晩年には松下政経塾を立ち上げ多くの政治家を育てた人物である。一代でパナソニックという大企業を築きあげ大成功を収めた松下氏は、決して恵まれた環境で育ったわけではない。彼自身自分の成功の要因を、「私は天から3つの恵みを受けて生まれた。家が貧しかったこと、身体が弱かったこと、小学校までしか進学できなかったこと。」と答えている。つまり彼は逆境の中で多くの決断を下しながら成功を収めていったのである。

その松下氏が著書の中で、人生における決断の仕方について次のように述べている。「決めにくい問題もある。決めたくない問題もある。決めることがむづかしい事柄もあろう。けれども、だからといって、決めないままで日を送っていては、事は進まない。問題は解決しない。よりよい姿は生まれない。だから、われわれ人間は、決めなければならないときには決めなければならない。勇気をふるって決断を下さなければならない。それが日々、われわれに求められているのである。」(『決断の経営』PHP研究所)

現在皆さんは、いや、皆さんだけでなく日本中の高校生が、高校卒業を目前にして決断すべき人生の岐路に立っている。中には家を遠く離れて初めて一人暮らしをしながら大学や仕事先に向かうことになる人もいるだろう。この決断の時に向けて、多くの人はいろいろなアドバイスをもらいながら3年間努力をしてきた。最善の選択ができるよう親や先生達に見守られながら今を迎えている。

しかし、忘れてはならないことは、これからの長い人生の中では、もっと重要と思われる決断の時がやってくるということだ。就職や結婚は遠い先のことではないし、もっと重要な決断があるかもしれない。その決断の時に、高校時代のような懇切丁寧なガイダンスはない。全て自分一人で決断しないとイケないのだ。だからこそ今、松下氏が言うように勇気をふるって自分で決断を下さなければならない。たとえそれが自分の望む最善の姿でなくても、我が儘を言うことなく自分の責任で決断する時なのである。

松下氏は晩年、もし叶えられる夢があったらと聞かれて、「全財産を渡してもいいから二十歳の頃に返して欲しい、そうしたらまた今の財産を築いてみせる。」と答えたそうである。この言葉の中で彼が言いたかったのは、「成功とは偶然に達成できることではない、多くの努力に裏付けされた必然の産物だ」ということではないだろうか。逆境にあって迷いながらも、強い意思と強い決断力で人生を切り開いてきた彼の言葉らしい。

今、皆さんは進路選択において最後の決断をしようとしている。幸いその選択の結果は、他の人生の選択と違いすぐに出る。その時松下氏のように、決して後悔することのない決断をしてほしい。